

# 地域活性化イベントの企画運営が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果についての研究

舛井雄一（國學院大學北海道短期大学部）

Keyword： 地域活性化イベント、全国まちづくりカレッジ、社会人基礎力、PBL、正課外

## 【目的】

近年、大学では、社会においてどのような仕事に就いても求められる社会人基礎力等の汎用能力を高めることを目的に PBL (Project based learning) やインターンシップなどの取組が盛んに行われている。PBL は、企業や地域が実際に抱えている課題などに対して大学生がグループになってその解決方法をまとめてプレゼンテーションを行うというケースが代表的である。それは正課の授業内で行われることが多く、その学習内容や成果についても多くの報告がある。

しかし、大学生にとっての学びの機会はカリキュラムに定められた正課の授業だけに限られるものではなく、部活動・サークルなどをはじめとした正課外の活動においてもその機会は多くある。本研究では、大学と市町村行政や商店街等との協働により、大学教育と地域社会を連動させ、まちづくり活動の学習や実践に結び付けようとしている大学関係者(学生や教職員)が集い、事例報告・ワークショップ・交流イベントなどのプログラムからなる全国規模での学生主体のフォーラムである「全国まちづくりカレッジ in 空知」というイベントの企画と運営を行った学生のケースを取り扱う。

このイベントは、大学の正課外で取り組まれた学生たちの自主的な活動であり、企業や市町村などから与えられた課題ではなく、自ら目標と課題を設定して取り組んだものである。また、このイベントの開催を通じて地域において様々な活動を行っているいくつかのコミュニティ同士の結びつきが生まれる、さらには新たなコミュニティとの関係が生まれるきっかけができたなどの地域活性化効果が表れた。そこで本研究では、そうした正課外の学生の自主的な活動を通じて社会人基礎力がどのように伸長するのかについて明らかにする。

## 【社会人基礎力とは】

2011 年より、高等教育の場である大学・短期大学においてキャリア教育が義務付けられ、キャリア教育が注目されている。そのキャリア教育では、より具体的には基礎的・汎用能力の向上が求められている。その基礎的・汎用能力の指標の一つとなっているのが社会人基礎力である。

社会人基礎力とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力から構成されており、その 3 つの能力は 12 の能力要素から構成されている。

(図 1 社会人基礎力とは)

前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場を理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人の約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

本研究では、授業の正課ではなく学生たちの自主的な正課外活動として、全国から集まる学生たちにとって学びがあり、楽しくもあるイベントを企画・運営するという課題を解決する PBL が学生たちにとってどのような教育的効果があるのかについて検証する。まちカレの企画・運営という課題は他の一般的な PBL における課題とは異なり、企業などから与えられた課題ではなく、自ら設定した課題を解決するという特徴を持つ。そうした点で一般的な PBL とは異なる教育的効果があることも考えられる。PBL では一般的に大学生の汎用能力を涵養することを目的のひとつとしているため、ここでは大学生の汎用能力として一般的な社会人基礎力を用いることとする。

## 【先行研究】

これまで社会人基礎力については様々な観点から研究が行われている。山下・行實(2019)では、正課の授業内で行われた J クラブ「徳島ヴォルティス」と「徳島大学」が共同開発したプログラムにて 12 の能力要素のうち 8 要素について能力が向上することを確認している。百合井(2012)では卒業研究のために組成されたプロジェクトによるプロジェクトベース学習によって、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、

「チームで働く力」の全てにおいてスキルが向上することが報告されている。また、インターンシップを実施することによる社会人基礎力の向上効果について研究した真鍋(2010)では、インターンシップを「日常業務型」と「課題設定型」に分類したうえで、そのタイプによって伸長状況に差があること、特に「課題設定型」では主体性、実行力、課題発見力、発信力が有意に伸長していることを明らかにしている。

社会人基礎力の向上についての研究は、上記のような大学の正課内での授業やインターンシップを対象としたものが多く、正課外での学生たちの自主的な活動によって社会人基礎力がどのように伸長するのかについての研究は少ない。学生たちの自主的な活動を対象とした研究としては、花田・山岡・白井(2012)があり、そこでは単位にならない大型商業施設との合同プロジェクトが社会人基礎力の育成に有用であることが示されている。

### 【本研究の目的】

上記のように正課外での学生たちの自主的な取り組みに関する調査はまだ少ない。また、正課外の取組によるキャリア教育のバリエーションが増えることは教育の設計においても有用であると思われる。そこで本研究では学生たちの正課外の自主的な取り組みである全国まちづくりカレッジ in 空知を企画するというPBLにおける社会人基礎力の伸長について調査する。

### 【全国まちづくりカレッジ in 空知の概要】

全国まちづくりカレッジ(以下、まちカレ)とは、大学と市町村行政や商店街等との協働により、大学教育と地域社会を連動させ、まちづくり活動の学習や実践に結び付けようとしている大学関係者(学生や教職員)が集い、事例報告・ワークショップ・交流イベントなどのプログラムからなる全国規模での学生主体のフォーラムのことである。

地域活性化やまちづくりに関わる学生たちは、それぞれの地域で地域住民や各種団体と連携を図りながらその活動を行っているが、地域住民との関係、活動内容の認知向上、活動の継続性など多くの課題を抱えている。しかし、多くの場合、その活動は孤立してしまいがちで活動が行き詰まりを見せることも少なくない。そのような中で、まちカレでは同じような悩みを持つ学生たちが一堂に会して話をするにより、学生たちの活動に対するヒントが得られる、活動に対するモチベーションが非常に高まるなどの効果が得られる。

まちカレは、主催したいという意向を持った学生たちから依頼を受けた各大学の担当教職員が、教職員の集まりのなかで立候補し次回の開催校を決める方式である。ほとんどの大学では、予算獲得などの事務的な業務を除いて、その企画内容の立案から当日の運営に至るまでを学生たちが組織する実行委員会が主体となって準備する。およそ半年から一年にかけての長い期間、実行委員会の学生たちはまちカレの準備にその時間の多くを割くこととなる。そのため、まちカレに参加する学生たちはもちろん、主催する側の学生たちにも大きな教育的な成果を期待することができる。

「第23回全国まちづくりカレッジ in 空知」が学生による実行委員会により2018年8月24日と25日に開催され、19団体129名の学生が参加した。

大会の内容としては、一日目に、開会式、各団体の活動報告会、まちづくり活動を行うにあたって生じる課題を共有し解決するワークショップ、会場を代えて懇親会が行われた。活動報告会は4つの教室に分かれ、各団体ごとに普段行っているまちづくり活動について紹介した。また、まちづくり活動を行うにあたって生じる課題を共有し解決するワークショップについても①意見の出しやすい環境づくり、②一人ひとりのモチベーションの差について、③SNSでの上手な情報発信の仕方、④テーマなしの4つに分かれ、それぞれ90分ほど議論した。

二日目には、開催地である中空知の魅力を多くの大学生に知ってもらうこと、そして日常的に活動している場所やその内容について知ってもらうことを目的に中空知の各地域、つまり滝川駅前の商店街、江部乙地域、砂川市、赤平市の4か所に分かれ、フィールドワークを行った。

### 【研究方法・研究内容】

研究方法は、社会人基礎力を測定するためのアンケートを作成し、その回答を用いて定量的な分析を行う。

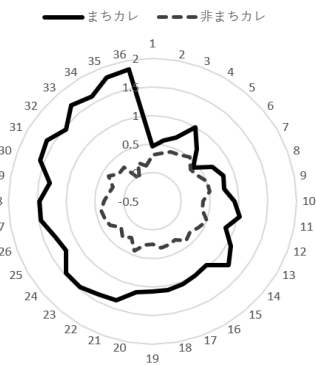
アンケートでは山下(2018)の社会人基礎力スケールを参考に質問項目を作成した。一つの能力要素について質問項目を3問設定することによって全部で36問の質問となった。各質問は、社会人基礎力が発揮された行動例をレベル別に5段階で提示し、自分の行動がどのレベルかを自己採点させた。1段階目が最も否定的な行動レベル(「できない」)であり、5段階目が最も卓越した行動レベル(「できる」)の5段階である。

このように作成した社会人基礎力を測定するアンケートをイベントの終了後(10月)に実施した。アンケートの対

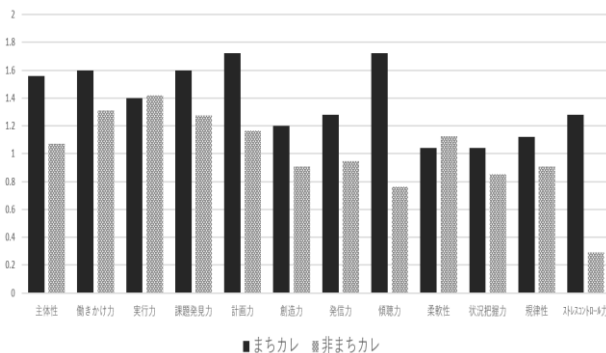
象としたのは実験群としてイベントの企画・運営を行った実行委員である25名(まちカレ)と対照群としての学生55名(非まちカレ)である。彼らにイベントの企画・運営を行う以前の段階(4月)と終了後(10月)のそれぞれの時点での自己評価をさせ、それらの伸長度を調査した。

【研究・調査・分析結果】

(図2 質問36項目における伸長度比較)



(図3) 社会人基礎力の伸長に関する自己評価



アンケートを集計し、社会人基礎力基礎力を構成する12の能力項目に対して3つずつ設定した合計36問の成長値を比較した結果、実験群である「まちカレ」、対照群の「非まちカレ」のいずれも36問のほとんどの項目でその伸長が確認された。

12の能力要素ごとにみえていくと、実験群、対照群共に4月段階から10月段階にかけて全ての項目において能力値の伸長が確認された。しかし、実験群と対照群の伸長度の平均を比較すると、12の能力要素のうち10の能力要素について実験群の方が伸長度が高かった。このことから概ね、実行委員会メンバーである実験群の方が社会人基礎力についてより成長していると自己評価していたと思われる。その中でも特に「傾聴力」と「ストレスコントロール力」については5%水準での有意差が確認された。

3つの能力(「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」)で見ると、いずれの能力もその伸長がみら

れたが、実験群と対照群で有意差があったのは「チームで働く力」であった。

(図4 実験群と対照群との伸長度比較)

社会人基礎力	まちカレ n=25	非まちカレ n=55	差	p値
前に踏み出す力				
①主体性	1.56	1.07	0.49	0.303
②働きかけ力	1.60	1.31	0.29	0.556
③実行力	1.40	1.42	-0.02	0.969
小計	4.56	3.80	0.76	0.549
考え抜く力				
④課題発見力	1.6	1.27	0.33	0.425
⑤計画力	1.72	1.16	0.56	0.288
⑥創造力	1.2	0.91	0.29	0.875
小計	4.52	3.35	1.17	0.225
チームで働く力				
⑦発信力	1.28	0.95	0.33	0.326
⑧傾聴力	1.72	0.76	0.96	0.025**
⑨柔軟性	1.04	1.13	-0.09	0.822
⑩状況把握力	1.04	0.85	0.19	0.639
⑪規律性	1.12	0.91	0.21	0.505
⑫ストレスコントロール力	1.28	0.29	0.99	0.024**
小計	7.48	4.89	2.59	0.100*
合計	16.56	12.04	4.84	0.197

\*\*<0.05、\*≤0.1

【考察】

調査の結果、特に「傾聴力」と「ストレスコントロール力」に伸長がみられた。

「傾聴力」については、学生たちが地域でのフィールドワークを企画する際に地域住民とのすり合わせの結果、自己評価を高めたと考えている。学生たちは、各地域で自らやってみたい企画のアイデアを持っていたが、それらをそのまま実行させてもらうことはなかなか出来なかった。そこでは、学生のやりたい企画と地域住民の考え方に違いがあり、それらについては話し合いを通じて解消していくことが求められた。そのようなプロセスの中で学生たちの傾聴力に対する自己評価が高まったものと考えられる。

「ストレスコントロール力」については、学生たちにとって約4か月間という準備期間は決して短いものではなく、また、学生間の人間関係、地域住民とのやり取り、担当教員からの期待やプレッシャーなど多くのストレス発生源があった。それらから多くのストレスがかかっていたことは容易に想像できる。しかし、イベントの開催日まで途中で投げ出すことのできない状況で、短期的にはなく長期的な成果を生み出すために学生一人ひとりがストレスへの対処方法を身に着けたと思われる。また、「ストレスコン

トロール力」については4月段階での自己評価が低かったという特徴をあげることができる。地域住民や担当教員といった年齢や価値観の異なる他者と深く関わることをイメージし、それに対するストレスがあったと思われる。しかし、最終的にはそうしたストレスを乗り越えてイベントを実施することができたことからその対処についても自信を深めたものと考えられる。

一方、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」の3項目からなる「前に踏み出す力」であるが、「主体性」、「働きかけ力」こそ非まちカレよりも自己評価は高かったものの、その差は有意差を示すほどではなかった。

全国まちづくりカレッジは学生たちが自ら企画・運営し、遠方から楽しみに参加する学生も多く、途中で投げ出すことはできない。従って、特に主体性や実行力などの「前に踏み出す力」の向上についての教育効果について期待された。しかし、その結果は有意差が見られるほどではなかった。これはどういうことであろうか。

高良・金城(2001)では、「インターンシップを通して、自己の未熟さや考えの甘さを突きつけられることにより、自己の現状についてのより厳密な内省が行われることになり、事後得点の上昇が生じなかったとも考えられる」と述べている。つまり、まちカレを主催するにあたっては、住民と協働していく必要があるが、住民は常に学生の目線に合わせるわけではなく、学生に対しては社会一般における水準を要求しながらともに作業を行っていくことが多かった。また、担当した教員も学生たちの考えを一段階レベルアップさせることを求め続けた。その結果、まちカレを主催した学生たちは高い難易度の課題に常に直面したことや、主体性の高い一般の社会人が自らの比較対象になったことから自分に厳しい自己評価がなされたと考えることができる。

#### 【今後の展開】

上記の結果から、全国まちづくりカレッジ in 空知という正課外の実践である地域活性化イベントの企画・運営というPBLを通じて学生たちの社会人基礎力についての自己評価が高まることが明らかとなった。

この結果は、現在高等教育機関でも求められるキャリア教育について、授業やインターンシップなど正課内で実施するには制約が多い場合でも学生たちの自主的なプロジェクトの実施によりその学習効果を高めることができることを示唆する。特に地域活性化を題材とするPBLは、大学の正課内で行おうとすると各主体の調整に多大なコ

ストと時間を要することになり、学生たちの学びの機会を失ってしまう可能性がある。そうした場合は、このような学生たちによる正課外の自主的な取り組みが有用であるとと思われる。

しかし、本研究における調査は自己評価形式をとっているため、本人たちの実感値であり、実際に社会人基礎力が伸長しているかどうかを客観的に測定しているわけではないことや社会人基礎力を測定するための質問項目に課題が残っている。

#### 【引用・参考文献】

- ・高良美樹、金城亮「インターンシップの経験が大学生の職業意識に及ぼす効果—職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として」琉球大学法文学部紀要人間科学、第8号、pp.41-72、2001年。
- ・花田朋美、山岡義卓、白井篤「自主参加型の地域連携プロジェクトによる大学生の学習効果—社会人基礎力からの考察—」東京家政学院大学紀要、第52巻、pp.159-169、2012年
- ・真鍋和博「インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響」インターンシップ研究年報、第13号、pp.9-17、2010年。
- ・水野晶夫「全国まちづくりカレッジ in 空知(そらち)まちづくり活動記録(名古屋学院大学水野) <https://milepost.exblog.jp/m2018-08-01/> (最終閲覧日: 2018年12月20日)
- ・山下順子「新人看護師教育における社会人基礎力育成研修の評価」山口医学、第67巻第1号、pp.5-13、2018年
- ・山下博武、行實鉄平「大学とJクラブの連携によるスポーツボランティア活動の評価: 社会人基礎力に着目して」体育・スポーツ経営研究、第29号、pp.1-16、2019年。
- ・百合井俊宏「PBL導入型卒業研究による社会人基礎力の育成」第60巻第5号、pp.28-33、2012年

---

<sup>i</sup> まちカレの定義については、名古屋学院大学マイルポスの担当教員である水野晶夫教授のブログである「まちづくり活動記録(名古屋学院大学水野)」<https://milepost.exblog.jp/>から引用させていただいた。